

【高校生の部】審査員賞

『樹木希林 120の遺言 死ぬときぐらい好きにさせてよ』（樹木 希林／著）

県立弘前実業高等学校 2年 成田 青空

老いることが怖い。そう思って生きてきた。今は当たり前に行っていることが、どんどんできなくなる。次第に死が近づいてくる。しかし、樹木希林さんはそれを面白いと、不幸だとは思わないと、この本の中で語っている。さらに、「いつかは死ぬ」ではなく「いつでも死ぬ」という感覚だと。こう考えられるのは当たり前ではないと思うし、固定観念や常識にとらわれない樹木さんらしいとも思った。でも、こういう風に考えることができたなら、悔いなく人生の幕を閉じることができるのではないかと気づくきっかけにもなった。この一冊は生、病、老、死など心に留めておきたい様々な遺言が残されている。同世代のあなたに、一度は読んでほしい。

『カスタード』（加藤 元／著）

県立八戸商業高等学校 2年 中野 日向

あの瞬間をやり直したいという気持ちは、誰もが持っている。「後悔」は、性別も年齢も関係が無く、それぞれの人の胸の深い部分に植え付けられている。時に、人生観にも影響を与え得る。この物語にも、同じ様に「後悔」を抱えた人々が登場する。私も祖父を亡くした時から、変化に気付けなかった「後悔」を胸に、自らを責めながら今日も生きている。ただ、悔しさを思い出しながらも、物語の登場人物たちの心の曇りが晴れていくのを見て、私もカタルシスを得てもいる。もしかしたら、「後悔」は人生の中でも、多くの経験を積む中高生に多く現れるものなのかもしれない。貴方は自分が抱えている「後悔」から目を背けて生きてはいないだろうか。

『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』（ブレイディみかこ／著）

県立八戸商業高等学校 1年 小坂 羽純

多様性があることはよいことなのではないでしょうか。この本は、著者の息子が体験する英国の学校でのリアルな日常が描れています。音楽が好きな子、家庭が貧しい子、差別的な発言をする子、学校には様々な個性をもった子がいます。そして、時には多様性があるからこそ、対立してしまうことがあります。私も家族、友達と自分とのちょっとした違いから、喧嘩になってしまったことが何度もあります。多様性がないほうが楽なのかもしれません。しかし、多様性があることには大きな可能性と新しさ、多くの魅力が詰まっています。そのことを教えてくれるのが、この本です。この本を読み終えたとき、自分が今、見ている世界がきっと大きく広がると思います。